

英語のことわざの文法

小寺 茂明

1. はじめに

英語教師にとって英語の教材研究、とりわけその言語材料の研究は大切なことである。実際、授業準備の段階などで英語の音声、語彙、語法、文法などについて教師として知りたいこと、調べたいことはいくらかでも出てくるものである。あるいは、日ごろ英語を読んだりしているときに感じるような疑問も少なくないであろう。それに対して、教師としてどう調査すべきなのか、あるいはどう対処すべきなのかについて対応を迫られることも少なくない。ここではそのサンプル的な検討材料として、いくつかのことわざ表現をとりあげてみたい。英語のことわざをめぐって語法、文法的事実を少し考察してみようというわけである。

さて、われわれ英語教師が英文を読んでいるときなどに、たとえば次のようなことわざ表現に出くわすことがある。

(1) Practice makes perfect.

(2) It's dogged that does it.

(3) Handsome is as handsome does.

(1)については、よく用いられることわざの1つであり、だれでも知っているもののように思われる。筆者もどこかでその意味は「習うより慣れろ」であると教わった記憶があるが、ただ、その中の perfect はどういう意味であるのか、あるいはその品詞は何であるのかについて説明されたような記憶はない。実際、perfect という単語は辞書で調べても形容詞としか出ていないが、それをどう考えるとよいのであろうか。つまり、その品詞は何なのかという問題である。

また、(2)については、その文構造としては dogged が強調された形の強調構文であるが、これは文法的にはどう考えるとよいのであろうか。つまり、過去分詞の形容詞的用法である dogged が、いったい強調構文で強調される対象になることがありうるのか

という問題である。それにしても、このことわざの文法構造があまり釈然としないので、筆者にはこれまでなんとなく気になっていたものである。

さらに、(3)における as の用法については現代英語では少し分かりにくいものであるが、これはどう考えるとよいのであろうか。実際、これはいささか意味のとりにくい表現でもあり、ここにもことわざ表現としての文法的な問題がひそんでいると言ってよいであろう。

さて、以上のような例について、読者の方々の中にもこれらのことわざの意味、語法、文法などについては、なんとなくよく分からないと思われる向きもあるのではないだろうか。そこで英語教師として、もしこのような理解できないあるいは生徒たちに説明しづらいような表現に出会ったらどうするか。これは自分なりにある程度の解答を出す必要があるものであろう。そして、自分なりに疑問を解決するというような問題(課題)解決能力は、当然のことながら、英語教師に求められる大切な能力の1つであると言わなければならない。ここではそのような視点から、これらのことわざについて考えてみたい。

2. Practice makes perfect. の表現について

まず、次のことわざについてとりあげてみよう。

(1) Practice makes perfect.

このことわざはよく用いられるものであり、教室で言及される場合には「習うより慣れろ(慣れよ)」などと訳されて、その日本語訳を通して指導されることが多いようである。したがって、このことわざはなぜそのような意味になるのかについて、英文そのものとしてはあまりよく理解されていないのではないかと思われるふしがある。というのは、この perfect の品詞が文法的に何であるのかよく分からないからである。

いったいこの perfect の用法は形容詞用法であるのか。それとも perfect に名詞用法というものがあるのだろうか。ただ、いくら辞書を調べても perfect の用法(品詞)としては名詞用法というものはなく、あくまでも形容詞なのである。実際、たとえば研究社の『新英和大辞典』(perfect の項)には、「完全に修得した、通曉した」という意味のところに、このことわざが例文としてあげられている。辞書的には形容詞と判断されているということである。

ところで、この perfect は英文としてのニュアンスからすると、「完全(完璧)なこと、完全なもの、完全な状態」などの意味になりそうなので、「練習が完全(完璧)[な状態]を作る」「練習すれば完璧になる」などと訳したいところだが、単語としてはどう見ても perfect は「完全な」という意味の形容詞なのである。英語教師としては文法意識が邪魔をするというのか、これを名詞的に訳すにはいささかためらいを感じざるを得ないのも事実である。単語の形にこだわって、どうしても perfect は形容詞であると考える以上は、この英文には少し無理があることになるのである。そこで、これにはいくつかの解釈が考えられるのではないかということで、次のような思案をすることになる。

第一の解釈：perfect の後に何らかの名詞の省略があると見る

まず第一の解釈としては、perfect の後に何らかの名詞が続いていて、それが省略されていると見ることが可能ではないかということである。後続名詞の省略という考え方である。たとえば skill, performance, maturity, efficiency のような名詞が省略されていると見るのである。どのような名詞がふさわしいかは文脈などに照らして判断されるであろう。これなら形容詞としての perfect は、後にくるはずの名詞の省略表現であるとして一応の納得はできるであろう。

第二の解釈：makes の後に us, you などの目的語を補う

次に第二の解釈として、makes の後に us, you, people などの一般的な目的語を補って解釈するのはどうであろうか。そもそもことわざとは、一般的に多くの人に当てはまるものと見なされるものであ

るから、そのような人々を表す語を次のように補うことは合理的なことであると考えられよう。

(2) Practice makes us [you] perfect.

この場合は、make の用法としては SVOC の第 5 文型に解釈されるであろう。この解釈も一応の理屈は通るであろう。なお、一般的な人々を表す語を補うほかに、たとえば us の代わりに、より具体的に our skill, our performance などを補うことも考えられるであろう。

第三の解釈：perfect は「臨時名詞」とであると見る

さらにもう一つの解釈がある。第三の解釈である。渡辺(1979: 53)に見られるものであるが、そこでは perfect は「臨時名詞」(nonce noun)であるとの解釈がとられている。「完全(さ)」というような意味であるが、英語としては perfectness などの名詞形をとっていないので、文法的にはやや破格的な用法である。われわれ英語教師はどちらかと言えば grammar conscious な人間でもあるので、文法的な破格ということには多かれ少なかれ違和感がともなうものではある。

しかし、これなら解釈としては「練習が完全[な状態]を作る」あるいは「練習すれば完全になる」というようなことで、このことわざの意味は問題なく理解できるであろう。文型的にもただの SVO の解釈でよいのである。この場合、perfect は名詞用法と見なされるので、意味的には what is perfect, (a state of) perfectness, being perfect のように解することができよう。

ただ、このことについてもう少し考えてみると、ほかにもこのような解釈をとることになると思える表現が英語にはときどき見られることに気づく。つまり、ふつうの英語の中でも臨時の名詞用法はときどき見られるものであり、それにはたとえば前置詞の目的語としての副詞や形容詞(e.g. from here, in here, be far from easy), あるいは二重前置詞のうちの後の前置詞(e.g. from behind, from under)などがある。from here や in here では、副詞である here がそれぞれの前置詞の目的語であり、形容詞の easy も(これは being easy と解してよいが)前置詞である from の目的語である。また二重前置詞では、いわば後の前置詞を目的語にとっている形であると見なせるであろう。このような臨時の名詞

用法は英語の中ではことわざ以外にもときどき見られるものなのである。

さらに次のような表現もある。

(3) *Slow and steady wins the race.*

(4) *Easy does it.*

これらはいずれも形容詞や副詞が主語になっている例である。(3)はよく知られたことわざであるが、(4)は口語表現でややイディオム化した語法の1つである。(4)は「ゆっくりやれ、気をつけろよ」などの意味であるが、初めてこれに接するとかなり違和感のある表現と感じられるのではないだろうか。文法的にはいささか説明しづらいが、副詞や形容詞などが臨時に主語になりうるということで、ここのeasyも「ゆっくりと(やること)」のような意味の、臨時の名詞用法であると考えてよいであろう。このように英語では形容詞や副詞などでときどき臨時の名詞的な機能をもって使われることがあるのである。

なお、このことわざについて、さらにもう1つ名詞的用法の解釈を支持する用例が大塚・高瀬(1995)に見られるのであげておこう。

(5) *Use (Practice) makes mastery (or perfect or perfectness).*

(常にやっていたら熟達する)

——大塚・高瀬(1995: 658)

この例では、主語はuseでもpracticeでもよいということであり、意味もほぼ同じことを表しているものである。また、目的語としてmastery(熟達)という名詞がきていることにも注目したい。それに、やや意外なことに、名詞形のperfectnessも許されるとしている。これらのことから推測できるように、そもそも(1)のperfectはSVOの目的語の位置にあり、それはもともと目的語という感覚、つまり名詞的な感覚の用法のものであると考えられるのである。

以上のことから、(1)の意味についての3つの解釈のうち、ここでは結論としては第三の解釈をとることにしたいと思う。つまり、臨時の名詞用法に解釈して「練習が完全なこと[状態]を作る」と考えるのである。これまで形容詞ということにこだわり過ぎてきた感があるが、それもほどほどにということであろうか。この場合も臨機応変に解釈すべきであろう。以上のことから考えて、臨時名詞という解釈は文法的にはいささか破格であるようにも思えるが、

ことわざというのはもともとやや特殊な側面をもつ表現でもあるので、それは許容される範囲のものだと判断できるであろう。

3. *It's dogged that does it.* の表現について

さらに、次のようなことわざを見てみよう。

(1) *It's dogged that does it.*

これにはthatではなくasを用いた次のような形もある。大修館書店の『ジーニアス英和大辞典』(doggedの項)などにも次のように出ている。

(2) *It's dogged as does it.*

(事の成否はがんばりひとつ。)

まず、ここのasやthatについては現代英語の文法では少し破格的な用法で、やや分かりにくいものであるが、いずれも同じ意味用法であり、関係代名詞(主格の用法)と見てよい。(後述の4で扱う*Handsome is as...*の場合のasも同じである。)

ただ、(1)と(2)とが同じであると見せるとしても、問題は(1)のthatを用いた強調構文をどう解釈するかである。つまり、doggedは過去分詞なのでどう見てもそれは機能的には形容詞であるから、このような強調構文で強調できるのは名詞や副詞などであって、通例このような形容詞を強調することはできないはずである。したがって、上の第三の解釈のようにdoggedが品詞としては名詞であれば都合がよいことになるのだが、それをどう考えるとよいであろうか。

考えてみるに、このようなdoggedも、意味的には「頑固であること、頑固さ、がんばり強さ、粘り強さ」などの名詞的な意味で用いられているものであり、この場合も臨時の名詞用法と見てよいものであろう。それに強調構文で強調されている以上、強調されているのは名詞であると見ることはきわめて普通であり、doggedはdoggednessのような意味の臨時の名詞用法として解釈しても何らおかしくはないのである。ことわざの表現そのものとしては名詞形にはなっていないが、そう解釈することで納得できるのではないだろうか。

もっとも、この場合のdoggedは後続名詞の省略と考えることもできよう。たとえばその後でdetermination, perseverance, persistence, resolutionのような名詞の省略があると考えるのである。

なお、臨時の名詞的用法をサポートできそうな材

料として次のような例があるのは参考にしていよう。

(3) *It is good that mends.*

(よくなるということはよいことである.)

—大塚・高瀬(1995: 360-361)

この表現は「人とか物とかが以前よりもよい人、よい物になったという話をきいたときに用いる」とされている。これも強調構文であり、強調する部分に *good* という形容詞が用いられているというかなり珍しい例である。形式的には(1)と同じパターンであり、この場合も考え方は同じである。また、日本語訳の上でも *good* が「よいこと」と訳されているように、これは強調構文で強調される形をとっていることでもあり、形は形容詞であるが名詞的用法と解釈するのが妥当ではないだろうか。これもことわざだから許されているとも言える用法であると考えられよう。

さらに(1)、(2)と同じ意味の表現として、次の形のものもある。

(4) *Dogged does it.*

これは過去分詞の *dogged* が主語となっている例である。(2の(4)を参照)これを解釈する場合にも、やはりある種の名詞用法であると見ることになるであろう。つまり、引用符をつけてみるとよく分かるように、

(5) '*Dogged*' does it.

のように見るのである。そもそも *dogged* が主語位置を占めていることからして、臨時名詞的であると見てよいであろう。このように(4)の *dogged* が名詞的と見なされうることも、(1)の *dogged* を臨時名詞と見る考え方を支持する材料になるであろう。

4. Handsome is as handsome does. の表現について

最後に、もう1つ次の例を見てみよう。

(1) *Handsome is as handsome does.*

この場合も *as* の代わりに *that* が用いられることもあるが、いずれにしてもこれはいささか難しい表現であろう。これなどは高校生レベルでは歯がたたず、この英文を見た高校生などからは次のような質問や疑問などがあがってきてもおかしくないであろう。

Handsome is as [that] handsome does. は

どのように解すればよいのか、分かりません。いったいどれが主語なのか、そもそもこれは文法的な文なのでしょう。また、*as* の用法は何なのでしょう。

このようにことわざ表現には独得の表現形式をもつものも少なくない。そこで、すでに見たように、まず文法的には *as* または *that* は関係代名詞であることを確認する必要がある。つまり、*as=that(=who, which)* と解するとよく、しかも先行詞(たとえば *he* など)が省略されているという用法の関係代名詞なのである。ただし、これは少し古い用法の英語で、今ではあまり使われることはないものである。

ことわざというのは、このように少し古い用法を含んでいたりするが、先行詞を含んだ形の関係代名詞は、Shakespeare の作品などにも用例は少なくない。次のような場合も、*He who (=anyone who)...* のように補って解釈することになろう。

(2) *Who steals my purse steals trash.*

(私の財布を盗む者はつまらぬものを盗むにすぎない。)

—『ジーニアス英和大辞典』, *steal* の項

このことから考えると、(1)の表現は現代英語では次のようになるであろう。そして、(3)c の表現がもっとも分かりやすいのものであろう。

(3) a. *Handsome is he that handsome does.*

(関係代名詞に *that* を用い、先行詞として *he* を補う)

b. *Handsome is he who does handsomely.*

(関係代名詞を *who* にし、*handsome* を *handsomely* に変更)

c. *He who does handsomely is handsome.*

(倒置を SVC の語順に戻す)

さらに、2番目の位置の *handsome* の意味も分かりにくいかもしれないが、それは *handsomely* (立派に、見事に、上品に)の意味である。この *handsome* にも語尾の *-ly* がないので形容詞と同じ形であるが、用法としては副詞用法である。なお、大塚・高瀬(1995: 230)によれば、(3)a と同じ意味の表現として次の形のものもあげられている。

(4) *He is handsome that handsome does.*

この全体の意味は「手際よく物事をなす人は美男である」となるが、具体的な意味としては、「美男でな

くても仕事をきれいにし遂げると美男に見える」の字義から、「みめより心」「外見よりも実践」の意となるとの解説がある。(大塚・高瀬 (1995: 230)を参照)

以上に見てきたように、この表現については as や that は関係代名詞であり、その先行詞が省略されている場合であると解することによって、文構造そのものは正しく理解されることになるであろう。

5. むすび

以上に検討してきたように、古くから用いられていることわざには、現代英語から見ると少し特殊なあるいは古めかしい語法や文法があることにまず注意が必要である。例外的な語法が少なくないのである。英語についてこのような疑問をもったときは、教師としてはできるだけその時その場で理解する努力をし、その場でどうもうまく解決できない場合、その疑問は必ず近いうちに時間をかけて解決するよう努力する必要がある。そして容易に分からない場合でも、いつまでも関心を持ち続けながら、分かるまで時間をかけて調べながら考えることが大切である。理解できるまで、納得できるまで関心を持ち続けることは教師としての心得と言ってよいであろう。人間とは不思議なもので、努力をしているうちに、突然のように解がひらめいたり、いろいろと思索を重ねるうちに思わぬ発見ができたりすることが少なくないからである。そして英語教師である以上は、常に指導法などの研究や工夫を怠らないだけでなく、できればひとかどの英語研究者でもありたいものと思う。

参考文献

- 渡辺藤一 (1979) 「文法と語法の研究法」, 朱牟田夏雄ほか著『英語研究法』(研究社), pp. 52-77.
 真野 泰 (2008) 「英語教師としてこの諺・名言は知っておきたい」, 『英語教育』, 9月増刊号, pp. 30-31.
 大塚高信・高瀬省三 (1995) 『英語ことわざ辞典』(新装版), 東京:三省堂.

[追記]

このたび『デュアルスコープ総合英語』の五訂版をまもなく発行することになりましたので、この場をお借りして監修者として一言述べさせていただきます。

おかげさまで多くの方々からご好評をいただき、このように版を重ねることができるとは監修者としてもうれしかぎりです。今回の改訂により、これまで以上に「読みやすい、分かりやすい、覚えやすい、使いやすい、役に立つ」参考書になるものといささか自負しています。今後ともさらにご利用、ご活用をいただきますよう、よろしく願いいたします。

(大阪教育大学教授)